日蓮大聖人御書全集

千日尼御前御返事（せんにちあまごぜんごへんじ）

（真実報恩経の事（しんじつほうおんぎょうこと））

新版1735～1743

千日尼御前御返事（真実報恩経の事）

弘安元年（'78）7月28日　57歳　千日尼

弘安元年太歳戊寅七月六日、佐渡国より千日尼と申す人、同じく日本国甲州波木井郷身延山と申す深山へ、同じく夫・阿仏房を使いとして送り給う御文に云わく「女人の罪障はいかがと存じ候えども、御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候いしを、万事はたのみまいらせ候いて」等云々。

夫れ、法華経と申し候御経は、誰仏の説き給いて候

ぞとおもい候えば、この日本国より西、漢土よりまた西、流沙・葱嶺と申すよりはまたはるか西、月氏と申す国に浄飯王と申しける大王の太子、十九の年、位をすべらせ給いて、檀どく山と申す山に入り御出家、三十にして仏とならせ給う。身は金色と変じ、神は三世をかがみさせ給い、すぎにしこと、来るべきこと、かがみにかけさせ給いてわせし仏の、五十余年が間、一代一切の経々を説きおかせ給う。

この一切の経々、仏の滅後一千年が間、月氏国に

漸　広

ようやくひろまり候いしかども、いまだ漢土・日本国等へは来り候わず。

仏滅度して後一千十五年と申せしに、漢土へ仏法渡りはじめて候いしかども、またいまだ法華経はわたり給わず。

仏法、漢土にわたりて二百余年に及んで、月氏と漢土との中間に亀茲国と申す国あり。彼の国の内に鳩摩羅えん三蔵と申せし人の御子・鳩摩羅什と申せし人、彼の国より月氏に入り、須利耶蘇磨三蔵と申せし人にこの法華経をさずかり給いき。その授け給いし時の御語に云わく「この法華経

は東北の国に縁ふかし」と云々。この御語を持って月氏より東方、漢土へはわたし給い候なり。

漢土には、仏法わたりて二百余年、後秦王の御宇に渡って候いき。

日本国には、人王第三十代欽明天皇の御宇治十三年壬申十月十三日辛酉日、これより西、百済国と申す国より、聖明皇、日本国に仏法をわたす。これは、漢土に仏法わたって四百年、仏の滅後一千四百余年なり。その中にも法華経はましましかども、人王第三十二代用明天皇の太

子・聖徳太子と申せし人、漢土へ使いをつかわして、法華経をとりよせまいらせて日本国に弘通し給いき。それより来、七百余年なり。

仏滅度して後はすでに二千二百三十余年になり候上、月氏・漢土・日本、山々・河々・海々遠くへだたり、人々・心々・国々、各々別たりて、語かわり、しなことなれば、いかでか仏法の御心をば我ら凡夫は弁え候べき。ただ経々の文字を引き合わせてこそ知るべきに、一切経はようように候えども、法華経と申す御経は八巻まします。

流通に普賢経、序分に無量義経、各一巻已上。この御経を開き見まいらせ候えば、明らかなる鏡をもって我が面を見るがごとし。日出でて草木の色を弁うるにに似たり。

序分の無量義経を見まいらせ候えば、「四十余年にはいまだ真実を顕さず」と申す経文あり。法華経の第一の巻の方便品の始めに「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」と申す経文あり。第四の巻の宝塔品には「妙法華経は、皆これ真実なり」と申す明文あり。第七の巻には「舌相は梵天に至る」と申す経文赫々たり。その外

は、この経より外の、さきのちならべる経々をば、星に譬え、江河に譬え、小王に譬え、小山に譬えたり。法華経をば、月に譬え、日に譬え、大海・大山・大王等に譬え給えり。

この語は私の言にはあらず、皆、如来の金言なり。十方の諸仏の御評定の御言なり。

一切の菩薩・二乗・梵天・帝釈、今の天に懸かって明鏡のごとくましますの日月も、見給いき、聞き給いき。その日月の御語もこの経にのせられて候。月氏・漢土・日本国の

前後並

ふるき神たちも皆、その座につらなりし神々なり。天照太神・八幡大菩薩・熊野・すずか等の日本国の神々もあらそい給うべからず。

この経文は一切経に勝れたり。地走る者の王たり、師子王のごとし。空飛ぶ者の王たり、鷲のごとし。南無阿弥陀仏経等は、きじのごとし、兎のごとし。鷲につかまれては涙をながし、師子にせめられては腹わたをたつ。

念仏者・律僧・禅僧・真言師等、またかくのごとし。法華経の行者に値いぬれば、いろを失い、魂をけすなり。

かかるいみじき法華経と申す御経はいかなる法門ぞと申せば、一の巻の方便品よりうちはじめて、菩薩・二乗・凡夫、皆仏になり給うようをとかれて候えども、いまだそのしるしなし。

たとえば、始めたる客人が、相貌うるわしくして心もいさぎよく、よく口もきいて候えば、いうこと疑いなけれども、さきも見ぬ人なれば、いまだあらわれたる事なければ、語のみにては信じがたきぞかし。その時、語にまかせて大いなること度々あい候えば、さては後のこともたの

もしなんど申すぞかし。

一切信じて信ぜられざりしを、第五の巻に即身成仏と申す一経第一の肝心あり。譬えば、くろき物を白くなすこと漆を雪となし、不浄を清浄になすこと濁水に如意珠を入れたるがごとし。竜女と申せし小蛇を現身に仏になしてましまし。この時こそ、一切の男子の仏になることをば疑う者は候わざりしか。

されば、この経は女人成仏を手本としてとかれたりと申す。されば、日本国に法華経の正義を弘通し始めましま

せし叡山の根本伝教大師の、このことを釈し給うには、「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」等。漢土の天台智者大師、法華経の正義をよみはじめ給いしには、「他経は、ただ男にのみ記して女に記せず乃至今経は皆記す」等云々。これは一代聖教の中には法華経第一、法華経の中には女人成仏第一なりとことわらせ給うにや。

されば、日本の一切の女人は、法華経より外の一切経には女人成仏せずと嫌うとも、法華経にだにも女人成仏ゆるされなば、なにかくるしかるべき。

しかるに、日蓮は、うけがたくして人身をうけ、値いがたくして仏法に値い奉る。一切の仏法の中に法華経に値いまいらせて候。その恩徳をおもえば、父母の恩、国主の恩、一切衆生の恩なり。父母の恩の中に、慈父をば天に譬え、悲母を大地に譬えたり。いずれもわけがたし。その中、悲母の大恩ことにほうじがたし。

これを報ぜんとおもうに、外典の三墳五典・孝経等によって報ぜんとおもえば、現在をやしないて後生をたすけがたし。身をやしない魂をたすけず。内典の仏法に入って

五千・七千余巻の小乗・大乗は、女人成仏かたければ悲母の恩報じがたし。小乗は女人成仏一向に許されず。大乗経は、あるいは成仏、あるいは往生を許したるようなれども、仏の仮言にて実事なし。ただ法華経ばかりこそ、女人成仏、悲母の恩を報ずる実の報恩経にては候えと見候いしかば、悲母の恩を報ぜんために、この経の題目を一切の女人に唱えさせんと願ず。

それに日本国の一切の女人は、漢土の善導、日本の恵心・永観・法然等にすかされて、詮とすべきに南無妙法蓮華経を

ば一国の一切の女人一人も唱うることなし。ただ南無阿弥陀仏と一日に一返・十返・百千万億反、乃至三万・十万反、一生が間、昼夜十二時にまた他事なし。道心堅固なる女人も、また悪人なる女人も、弥陀念仏を本とせり。わずかに法華経をことととするようなる女人も、月まつまでの手遊てすさび、おもわしき男のひまに、心ならず心ざしなき男にあうがごとし。されば、日本国の一切の女人、法華経の御心に叶うは一人もなし。

我が悲母、詮とすべき法華経をば唱えずして弥陀に心を

懸

かけば、法華経は本ならねばたすけ給うべからず、弥陀念仏は女人たすくる法にあらず、必ず地獄に堕ち給うべし。いかんがせんとなげきしほどに、我が悲母をたすけんために、弥陀念仏は無間地獄の業なり。五逆にはあらざれども、五逆にすぎたり。父母を殺す人は、その肉身をばやぶれども、父母を後生に無間地獄には入れず。

今、日本国の女人は必ず法華経にて仏になるべきを、たぼらかして一向に南無阿弥陀仏になしぬ。悪ならざれば、すかされぬ。仏になる種ならざれば、仏にはならず。弥陀

歎　助　破　成　誑　賺

念仏の小善をもって法華経の大善を失う。小善の念仏は大悪の五逆罪にすぎたり。譬えば、承平の将門は関東八箇国をうたえ、天喜の貞任は奥州うちとどめし、民を王へ通ぜざりしかば、朝敵となりてついにほろぼされぬ。これらは五逆にすぎたる謀反なり。

今、日本国の仏法もまたかくのごとし。色かわれる謀反なり。法華経は大王、大日経・観無量寿経、真言宗・浄土宗・禅宗・律僧等は、彼々の小経によって法華経の大怨敵となりぬ。

しかるを、日本の一切の女人等、我が心のおろかなるを
ば知らずして、我をたすくる日蓮をかたきとおもい、大怨敵
たる念仏者・禅・律・真言師等を善知識とあやまてり。た
すけんとする日蓮、かえりて大怨敵とおもわるるゆえに、
女人こぞりて国主に讒言して伊豆国へながせし上、また
佐渡国へながされぬ。

ここに日蓮、願じて云わく「日蓮は全く誤りなし。たと
い僻事なりとも、日本国の一切の女人を扶けんと願ぜる
志はすてがたかるべし。いかにいわんや、法華経のまま

に申す。しかるを、一切の女人等、信ぜずはさてこそあるべきに、かえりて日蓮をうたする。日蓮が僻事か。釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・二乗・梵釈・四天等、いかに計らい給うぞ。日蓮僻事ならば、その義を示し給え。ことには日月天は眼前の境界なり。また仏前にしてきかせ給える上、法華経の行者をあだまんものをば『頭七分に破れん』等と誓わせ給いて候えば、いかんが候べき」と、日蓮強盛にせめまいらせ候ゆえに、天この国を罰す。ゆえにこの疫病出現せり。

他国よりこの国を天おおせつけて責めらるべきに、両方の人あまた死ぬべきに、天の御計らいとして、まず民を滅ぼして人の手足を切るがごとくして、大事の合戦なくして、この国の王臣等をせめかたぶけて、法華経の御敵を滅ぼして正法を弘通せんとなり。

しかるに、日蓮、佐渡国へながされたりしかば、彼の国の守護等は国主の御計らいに随って日蓮をあだむ。万民はその命に随う。念仏者・禅・律・真言師等は、鎌倉よりも「いかにもして、これへわたらぬよう計れ」と申しつかわし、

極楽寺の良観等は、武蔵前司殿の私の御教書を申して、弟子に持たせて日蓮をあだみなんどせしかば、いかにも命たすかるべきようはなかりしに、天の御計らいはさておきぬ、地頭・地頭等、念仏者・念仏者等、日蓮が菴室に昼夜に立ちそいて、かよう人もあるをまどわさんとせめしに、阿仏房にひつをしおわせ、夜中に度々御わたりありしこと、いつの世にかわすらん。ただ悲母の佐渡国に生まれかわりてあるか。

漢土に沛公と申せし人、王の相有りとて、秦の始皇の

勅宣を下して云わく「沛公打ってまいらせん者には、不次の賞を行うべし」。沛公は里中には隠れがたくして、山に入って七日・二七日なんど有りしなり。その時、命すでに終おわりぬべかりしに、沛公の妻女・呂后と申せし人こそ山中を尋ねて時々命をたすけしか。彼は妻なればなさけ捨すてがたし。

これは後世をおぼせずば、なにしにか、かくはおわすべき。またその故に、あるいは所をおい、あいはかりょうを引ひき、あるいは宅をとられなんどせしに、ついにとおらせ給

いぬ。法華経には、過去に十万億の仏を供養せる人こそ今生には退せぬとはみえて候え。されば、十万億供養の女人なり。

その上、人は見る眼前には心ざし有りとも、さしはなれぬれば心はわすれずともさてこそ候に、去ぬる文永十一年より今年弘安元年まではすでに五箇年が間この山中に候に、佐渡国より三度まで夫をつかわす。いくらほどの御心ざしぞ。大地よりもあつく、大海よりもふかき御心ざしぞかし。釈迦如来は、我が薩埵王子たりし時うえた

る虎に身をかいし功徳、尸毘王とありし時鳩のために身を
かえし功徳をば、我が末の代、かくのごとく法華経を信ぜ
ん人にゆずらんとこそ、多宝・十方の仏の御前にては申さ
せ給いしか。

その上、御消息に云わく「尼が父の十三年は来る八月
十一日」。また云わく「ぜに一貫もん」等云々。あまりの
御心ざしの切に候えば、ありえて御わしますに随って
法華経十巻おくりまいらせ候。日蓮がこいしくおわせん
時は、学乗房によませて御ちょうもんあるべし。この御経

をしるしとして、後生には御たずねあるべし。

そもそも、去々・去・今年のありさまは、いかにかなら せ給いぬらんと、おぼつかなさに、法華経にねんごろに申し 候いつれども、いまだいぶかしく候いつるに、七月 二十七日申時に阿仏房を見つけて、「尼ごぜんはいかに。 こうの入道殿はいかに」と、まずといて候いつれば、「い まだやまず。こうの入道殿は同道にて候いつるが、『わせ はすでにちかづきぬ。こはなし。いかんがせん』とて、かえ られ候いつる」とかたり候いし時こそ、盲目の者の眼の

印 後生 御たずねあるべし 去々 去 今年 ありさま いかにかなら せ給いぬらん おぼつかなさ 法華経 ねんごろ 申し 候いつれども いまだ いぶかしく 候いつるに 七月 二十七日申時 阿仏房 見つけて 尼ごぜん はいかに 国府 入道殿 いかに 問 候いつれば 病 国府 入道殿 同道 候いつるが 早稲 はすでに 近 ちかづきぬ 子 はなし いかんがせん 帰 かえ られ 候いつる 語 かたり 候いし 時こそ 盲目 者 眼

開

あきたる、死し給える父母の閻魔宮より御おとずれの夢の内に有るをゆめにて悦ぶがごとし。あわれ、あわれ、ふしぎなることかな。これも、かまくらも、この方の者はこの病にて死ぬ人はすくなく候。同船にて候えば、いずれもたすかるべしともおぼえず候いつるに、ふねやぶれてたすけぶねに値えるか。また竜神のたすけにて、事なく岸へつけるかとこそ不思議がり候え。

谷　　歎　　御　　伝

さわの入道のことなげくよし、尼ごぜんへ申しつたえさせ給え。ただし、入道のことは申し切り候いしかば、おも

思

い合わせ給うらん。いかに念仏堂ありとも、阿弥陀仏は法華経のかたきをばたすけ給うべからず。かえりて阿弥陀仏の御かたきなり。後生、悪道に堕ちて、くいられ候らんことあさまし。

ただし、入道の堂のろうにて、いのちをたびたびたすけられたりしことこそ、いかにすべしともおぼえ候わね。学乗房をもって、はかにつねづね法華経をよませ給えとかたらせ給え。それも叶うべしとはおぼえず。さても尼のいかにたよりなかるらんとなげくと申しつたえさせ給い

候(そうら)え。またまた申(もう)すべし。

七月二十八日(しちがつにじゅうはちにち)

佐渡国府(さどこう)の阿仏房尼御前(あぶつぼうのあまごぜん)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)